

宇品で合流した独歩兄弟と富永、山口の四人は、尾間たちには待っているからこゝに来いと宿に云い残して、朝七時発の緑川丸に乗って大阪へ向った。尾間たちを待てば三日以上滞在せねばならず、大阪や東京で会うとしても困るに違いないから、東京の今井氏の処へ来るようにとの旨を書き残したのであった。

尾間と並河は、九月四日に両親や友人に見送られて佐伯を出発した。

先行の四人は五日の朝三時に大阪川口に着き、夜の明けのを待って宿につき、朝食をすませると、四人は打ち揃って中の島から天神橋に出て大阪城を見物して廻り、一旦宿に帰り駅に出て午後一時の上り列車に乗った。独歩の発議で途中彦根の独歩の親友大久保余所五郎氏を訪ねる為めに下車し、大久保宅に行き、彦根城に案内されて琵琶湖の風景を眺望したり、源五郎鮎のご馳走を戴き、一寸仮眠して翌六日の午前一時車で駅に出て東京に向った。新橋に着いたのは午後七時、すぐ宿につき銀座を一寸散歩した。七日に独歩は当分の下宿として麹町区三丁目の藤井方を決めた。山口はその晩自分の兄を訪ねた。八日から貸家を探して歩いた。富永はその日植村正久牧

師を訪問した。

一方尾間たちは八日漸く東京にたどり着いたが、今井氏の住む麹町区三番町に行くにはどう行ったらよいのやら解らないで困っているところに、佐伯出身の三輪類平、西田禎一の二人が来て教えて呉れた。人力車に乗ってようやく今井氏の宅を尋ねあてた。氏はすぐ独歩たちの下宿屋へ案内して呉れ、四人と会うことが出来た。そして七人で昼食を共にした。終ると外出し見物少々借家を探して歩いた。麹町区と牛込区とを廻ってわずか二軒を探し出した。

(つづく)

表紙解説 大師庵宝塔 軸丸 勇(写並びに文)

宇目町塩見園の大師庵に同型のものが二基ならんでたっている。向って左側に貞和五年己十月二十八日の銘がある。即ち一三四九年(六三一年前)北朝の年号である。相輪の一部が欠落している、確実な塔高はわからないが、約二・五mある。立派な細工で品格があり、佐伯南郡地域には類を見ない、すばらしい宝塔である。足利尊氏の利生塔造塔令により造立されたものかも知れない。県指定重要文化財である。